**研究発表要旨**

***An Accidental Man* に登場する
＜偶然の運命に翻弄される＞ものたち**

**中窪　靖**

作品*An Accidental Man*(1971) の主人公、オースティン・ギブソン・グレイは、作品の中で、主として次のような〈偶然の運命〉に翻弄される。まず、彼は突然職場から解雇を言い渡される。次に、彼自身のアパートをひとに明け渡す羽目に陥る。次に、彼が兄の車を運転中に幼い女子の命を奪う。次に、その子の義理の父親に重症を負わせる。そして、更に、彼の妻が命を絶つ。

このように、彼の身の回りには、不運が付きまとうが、この物語の中では、彼一人のみが〈偶然の運命〉に翻弄されているとは言いがたい。例えば、彼の兄マシューは彼と精神的な確執を抱えながら、弟であるオースティンに翻弄される。また、妻ドリナはオースティンの正体を知るにつれて、彼との心の距離を広げていく。また、シャーロット・レジャードは彼女自身の母親の死に直面するだけでなく、次第に病んでいくドリナのことを、友人メイヴィスと一緒になって支えていく。更に、グレイシィ・ティスボーンとルートヴィッヒ・ルフェリエという前途洋々に見えた将来あるカップルは、特にルートヴィッヒがベトナム戦争の徴兵忌避者であるということが大きな原因となり破局を迎える。

彼らはそれぞれ、あらがい難い〈偶然の運命〉に翻弄されているといえる。また、彼らは、オースティンを軸として物語の中で行動する。つまり、〈偶然の運命〉を軸としてこの物語を解釈すると次のようになる。

　〈偶然の運命に翻弄される〉オースティンが、最後にたどり着くのは、花婿の父となることである。これも、巡り巡って彼に訪れた〈偶然の運命〉の1つと考えてよいだろう。そういう目で見れば、上述の数名の登場人物も、それぞれがそれぞれの〈偶然の運命〉に流されながら生きていたと考えられるだろう。

　マシューは、かつての石切り場の出来事に強くこだわり、兄弟としての心の交流を築けないでいた。ドリナは、何かしらオースティンに対して"恐れ"の感情を抱く中で、彼と暮らすことに違和感を覚えるようになる。そして、彼女は夫が他の女性(ミッツィ)と一緒にいるところを発見したあと、偶発的な事故で命を絶つ。シャーロットは、義理の弟のジョージやオースティンの兄のマシューへのほのかな思いを感じながらも、孤独な気持ちを打ち消しがたく自殺を図る。幸い、ガースの機転で一命を取り留めることができた。一方で、ドリナに対する対応に見られるように、強くて心優しい面もある。そして、グレイシィは、ルートヴィッヒという最良の婚約者を見つけたと信じていたが、結婚を目前に婚約は白紙に戻されることになる。彼女は、物語の主人公のオースティンとのつながりが一番薄いと思われていたが、最後になって彼の息子のガースと結婚することになり、にわかに、密接な関係を結ぶことになる。

　このような登場人物たちの身に降りかかる事柄を、〈偶然の運命〉がなせる業と考えることに特に無理は無いように思われる。マードック自身、1959年に発表したエッセイの中で、contingent という語を用いて次のように〈偶然の運命〉について述べている。「偉大な小説家は、偶発的なる現象を恐れることない。しかも、小説家がその偶発的なる現象を受け入れたとき、小説家は、作品が凡庸になることをまぬかれる」と。このことを加味すれば、この作品の中の登場人物たちがそのタイトルが意味する〈偶然の運命〉に支配されながらも、物語の展開に寄与することは当然のなせる業であろう。マードックは、偶然の運命に支配される登場人物たちによって、現代人の誇張された自我に警告を与えているのかもしれない。